

---

# 完全母児同室制および母乳哺育への移行

福永寿則

---

周産期医学 第26巻 第5号 別刷

(1996年5月)

---

東京医学社

〒113 東京都文京区本郷3-35-4  
電話 03(3811)4119 (代表)

---

# 完全母児同室制および母乳哺育への移行

福永寿則<sup>\*,\*\*</sup>

## はじめに

児の心身ともに健やかな成長のためには、その人間性形成の出発点における「母と子の絆」が良好に形成されることが重要であると考えられている。そして、母乳哺育の利点として母乳自体では、栄養・アレルギー・免疫等の面での長所が、また授乳という行為については、「母と子の絆」の形成・母子相互作用促進、母体の復古促進等の長所があげられている。さらに、出産後の母児同室は、母子相互作用促進はもちろん、母乳哺育成功のためにも極めて重要である。

WHOとUNICEFは1989年に「母乳育児の保護、促進、支援—産科施設の特別な役割」という声明を発表した。これを受けて、日本でも「日本母乳の会」(旧「母乳をすすめるための産科医と小児科医の会」<sup>1)</sup>)が結成された。

しかし、我が国では未だ、完全母児同室制・母乳哺育(原則として糖液・ミルクを足さない)に取り組んでいる産科施設は少なく、その主な原因としては、①ミルクを足さない場合母乳不足による児の異常が心配、②褥婦への負担増大を心配、③個室が少ないなどの設備面、の3点があると思われる。

そこで、当科では平成6年4月から完全母児同室制・母乳哺育に移行したのを期に、それ以前をコントロールとして、特に①②について検討した。

## I. 対象と方法

次のA、B群を対象とした。

\* ふくなが としのり 土佐市立土佐市民病院産婦人科  
 医長 \*\* 現 くぼかわ病院産婦人科 医長  
 [〒786 高知県高岡郡窪川町見付902-1]

A群：平成6年4月15日から10月31日までの分娩79例。分娩直後からの24時間母児同室制および頻回授乳(自律授乳)。原則として糖液・ミルクを足さず、直母量測定もしない。

B群：平成5年4月11日から平成6年4月14日までの分娩123例。生後2日目から、午前10時から午後7時までの母児同室。生後8時間目から3時間ごとの授乳。毎回直母量を量り、不足分をミルク追加。深夜1時、4時はミルクのみ。

研究方法は、カルテからの調査とアンケート調査の二つとした。

カルテ調査では、帝王切開、低出生体重児、妊娠36週未満の早産、哺乳障害をきたすような児の奇形等は除き、A群68例、B群98例を解析対象とした。

アンケート調査は、上記除外項目にかかわらず、退院時に母児ともに特に異常を認めなかったA群76例、B群109例にアンケート用紙を送付し、それぞれ49例(64%)、58例(53%)を回収し、これを解析対象とした。

有意差検定は、t検定、カイ二乗検定、Fisherの直接確率計算法により、 $P < 0.05$ を有意水準とした。

## II. 結果

### 1. カルテ調査結果

#### 1) 児についての検討

(1) 対象背景：母体については、年齢(A群 $26.6 \pm 4.8$ 歳、B群 $28.3 \pm 5.0$ 歳)および夫立ち会い分娩率(A群16例(24%)、B群7例(7%))に、それぞれ $P < 0.05$ 、 $P < 0.01$ で有意差がみられた。

児については、性別および出生体重には有意差

表 1 児の排便・排尿回数

日齢	便回数			尿回数		
	A群	B群	有意差	A群	B群	有意差
1日目	3.5±2.1	4.3±2	p<0.025	3.8±1.9	4.1±1.6	NS
2日目	3.9±2.4	4.9±2.4	p<0.025	4.1±2.1	5.6±1.8	p<0.005
3日目	4.8±3	5.9±2.6	p<0.05	5.4±2.4	6.9±2.1	p<0.005
4日目	5.6±3.3	6.3±3	NS	7.2±3	7.6±2.4	NS
5日目	6±2.7	6.7±2.4	p<0.1	8±2.8	7.6±2.3	NS
6日目	6.1±2.3	6.7±3.4	NS	7.4±2.5	8±2.4	NS
計	28.3±10.4	35.1±9.8	p<0.005	34.8±9.9	39.9±8.4	p<0.005

はなかった。1分後アプガースコアがA群9.1±0.5, B群8.7±1.3とP<0.01で有意差がみられたが、5分後アプガースコアではA群9.6±0.6, B群9.4±0.8であり有意差は認められなかった。

(2) 糖液・ミルクの追加について：A群では、以下の5項目を糖液・ミルク追加基準とした。①経過中に児体重が2,500g未満になったもの、②出生体重より10%以上減少したもの、③尿回数が1日に1回以下のもの、④体温上昇し環境の調整によっても改善しないもの、⑤児が泣き止まないなど母親の精神的負担の大きいもの。基準の①②に対しては、ミルクを3～4時間に1回授乳後10～20ml追加した。③④⑤に対しては、適宜5%ブドウ糖液を追加した。その結果、A群は10例にミルクを追加し、その平均は237mlであった。糖液・ミルクを1回も足さなかったのは68例中25例であった。なお、光線療法中も自律授乳(頻回授乳)を続行した。また、母親の疲労感の強い場合には、児を一時的に新生児室で預かった。

B群は、98例全例にミルクを追加し、その平均は619mlであった。

(3) 児の便・尿回数(表1)：便回数は生後3日目まではB群が有意に多かったが、4日目以降は有意差はみられなかった。尿回数も生後2,3日目はB群が有意に多かったが、それ以外では両群間に有意差はみられなかった。これらは、ミルク追加に起因する生後3日目までの哺乳量の違いによると思われる。

(4) 児体重(%)推移(図1)：出生体重を100%とすると、A群は生後2.5±0.9日に最低体重になり、その減少率は7.8±1.9%であった。一方、B群は生後1.9±0.8日に最低体重になり、その減少

率は5.7±1.6%であった。体重最大減少日齢および体重最大減少率は、ともにP<0.005で両群間に有意差がみられた。一方、体重最大減少時以降生後6日目までの体重(%)増加率はA群1.2%/日、B群1.0%/日でA群に大きい傾向(P<0.1)がみられた。

また、1カ月健診時の、出生体重からみた児体重増加率はA群32.2±10.8g/日、B群34.8±12.5g/日で、両群間に有意差はみられなかった。

(5) 経過中の児の異常：38°C以上の発熱はA群4例(6%)、B群0例で、両群間に有意差(P<0.02)がみられた。しかし、A群の4例もすべて全身状態良好で感染徴候もなくうつ熱と考えられ、環境の調整、糖液の投与により速やかに正常化した。

光線療法を要した高ビリルビン血症の発症率には両群間に有意差はみられなかった。また、その他には児に特に異常はみられなかった。すなわち、児については、前記「糖液・ミルク追加基準」に注意して診察を行えば、24時間母児同室制・自律授乳(頻回授乳、原則として糖液・ミルクを足さない)は、特に問題ないと思われた。

## 2) 母親についての検討

(1) 直母回数(図2)：直接授乳の回数はすべての日においてA群すなわち頻回授乳をしたほうが当然有意に多く、多い母親では1日に15～19回くらいであった。また、産後1～6日間の合計は、A群60.3回に対してB群37.5回であった。A群においても母乳分泌量が急に増加する産後3～4日を過ぎると授乳回数が安定する傾向がみられた。

(2) 退院時および1カ月健診時の授乳内容：初産婦と経産婦に分け、A群初産婦(29名)とB群

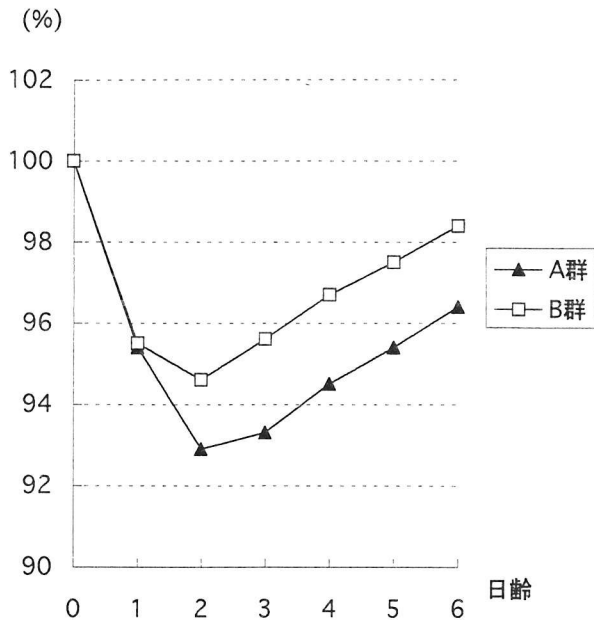


図1 児体重推移(%)

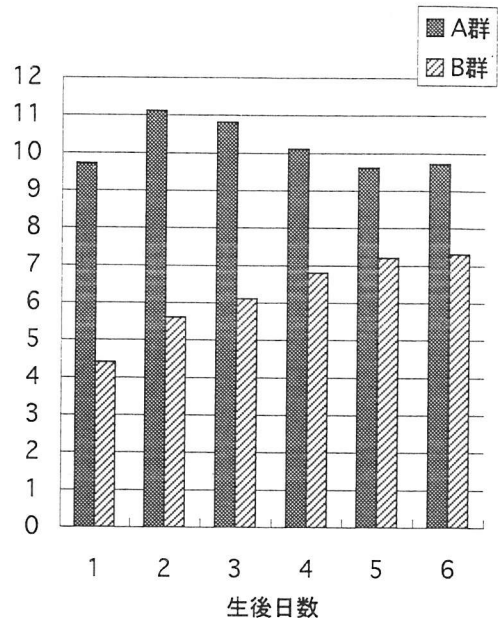


図2 直母回数

初産婦 (39名), A群経産婦 (39名) とB群経産婦 (59名) につき比較検討した。背景因子では, 夫立ち会い分娩がA群初産婦 11例 (38%), B群初産婦 4例 (10%) でA群が多かった ( $P < 0.01$ ) 以外には, 両群間に有意差はなかった。

初産婦では, 退院時母乳率はA群 90.0%, B群 76.9%であり, 1カ月健診時母乳率ではA群は 72.4%とB群の 35.9%に比べ有意に高かった。注目されるのは, 退院時母乳のみだった者のうち, 1カ月健診時にはミルクを追加していた者が, A群 23.1%に比しB群では 56.7%と有意に多いことである。このことは, 24時間母児同室で哺乳量測定をせず自律授乳であったA群のほうが, 育児にも慣れ, 自信を持って母乳哺育でき, 誤った母乳不足感に惑わされることが少ないことを示している。

また, 経産婦でも, A群は退院時母乳率 87.2%, 1カ月健診時母乳率 69.2%とB群のそれぞれ 61.0%, 49.2%に比べ有意に高い母乳率であった。

すなわち, 24時間母児同室制・自律授乳 (頻回授乳, 原則として糖液・ミルクを足さない) にするだけで, 退院時および1カ月健診時の母乳率は著明に上昇した。

## 2. アンケート調査

以下の検討も, 初産婦と経産婦に分け, A群初産婦 (19名) とB群初産婦 (28名), A群経産婦

(30名) とB群経産婦 (30名) につき比較検討した。

### 1) 母乳哺育に対する感想 (表2)

入院中の母乳哺育, すなわちA群は24時間自律授乳 (頻回授乳), B群は3時間ごとの授乳 (深夜は休む) に対する感想としては, 初産婦のみ「大変であった」がA群がB群よりも多い傾向にあったが, 有意ではなかった。

一方, 退院後の母乳哺育に対する感想としては, 初産婦では「順調で楽であった」, 「楽ではないが満足できた」という肯定的なものの合計が, A群 74%とB群の 36%に比し有意に多かった。また, 経産婦でも「順調で楽であった」という回答がA群に有意に多く, 逆に「大変であった」という回答はB群に有意に多かった。

### 2) 母児同室に対する感想 (表3)

A群は24時間母児同室, B群は午前10時から午後7時までの母児同室であったが, 初産婦では, 「順調でよかった」がB群に, 「楽ではないが満足できた」がA群に有意に多かった。しかし, 両方を合わせた肯定的な回答でみると, A, B群間に有意差はみられなかった。また, 経産婦でも「楽ではないが, 満足できた」という感想がA群に有意に多かった。「大変であった」はA群の初産婦, 経産婦各1名にみられた。

上記母乳哺育, 母児同室に対する感想の検討から, 「必要な場合には糖液・ミルクを足します」,

表 2 母乳哺育に対する感想

		初産婦			経産婦		
		A群	B群	有意差	A群	B群	有意差
入院中	順調で楽であった	3(16%)	5(18%)	NS	13(43%)	9(30%)	NS
	楽ではないが満足できた	7(37%)	11(39%)	NS	10(33%)	10(33%)	NS
	まあまあ	2(11%)	8(29%)	NS	5(17%)	8(27%)	NS
	大変であった	7(37%)	4(14%)	p < 0.1	2(7%)	3(10%)	NS
退院後	順調で楽であった	6(32%)	4(14%)	NS	15(50%)	7(23%)	p < 0.05
	楽ではないが満足できた	8(42%)	6(21%)	NS	7(23%)	9(30%)	NS
	上記2項目合計	14(74%)	10(36%)	p < 0.02	22(73%)	16(53%)	NS
	まあまあ	4(21%)	11(39%)	NS	6(20%)	6(20%)	NS
	大変であった	1(5%)	6(21%)	NS	2(7%)	8(27%)	p < 0.05

入院中はA群：24時間頻回授乳，原則として母乳のみ

B群：3時間ごとの授乳・ミルク追加あり，深夜はミルクのみ

表 3 母児同室に対する感想

	初産婦			経産婦		
	A群	B群	有意差	A群	B群	有意差
順調でよかった	4(21%)	17(61%)	p < 0.01	11(37%)	17(57%)	NS
楽ではないが満足できた	12(63%)	6(21%)	p < 0.01	15(50%)	6(20%)	p < 0.02
上記2項目合計	16(84%)	23(82%)	NS	26(87%)	23(77%)	NS
まあまあ	2(11%)	4(14%)	NS	3(10%)	4(13%)	NS
大変であった	1(5%)	0(0%)	NS	1(3%)	0(0%)	NS

A群：24時間母児同室，B群：午前10時から午後7時までの母児同室

表 4 母児同室のよかった点(複数回答)

	初産婦			経産婦		
	A群	B群	有意差	A群	B群	有意差
赤ちゃんと一緒に安心できた	17(89%)	14(50%)	p < 0.01	18(60%)	13(43%)	NS
同室で世話ができて満足	9(47%)	9(32%)	NS	11(37%)	11(37%)	NS
可愛く，1日が楽しかった	11(58%)	14(50%)	NS	13(43%)	21(70%)	p < 0.05
育児への自信ができた	7(37%)	5(18%)	NS	9(30%)	6(20%)	NS

A群：24時間母児同室，B群：午前10時から午後7時までの母児同室

「疲労感が強ければ児を新生児室で預かります」という支援の下では，24時間母児同室・頻回授乳が母親の負担をそれほど増大させていないことが明らかとなった。逆にA群のほうが満足感が高く，また退院後の母乳哺育についても，B群では「大変であった」者の割合が高いのに対し，A群では良好に経過する者が多くなっている。

### 3) 母児同室のよかった点(表4)

母児同室のよかった点として，初産婦のA群に「赤ちゃんと一緒に安心できた」という回答が有意に多く，他の項目でも有意差はなかったがA群の

ほうに多くみられた。ただ，経産婦の「赤ちゃんが可愛く，1日が楽しかった」という項目のみ，B群がA群よりも有意に多かった。これは，経産婦では新生児に対する感動が第1子の時よりも減少していることに加え，A群では前回分娩時との違いが大きく戸惑いや「入院中くらいはもっと休みたい」という思いが強かったためと思われる。

### 4) 次回分娩時の母児同室希望

「次回分娩するとしたら，(今回と同じ)母児同室を希望しますか?」という質問に対し，「希望しない」はA群初産婦1例(5%)，B群初産婦1例

(4%), A群経産婦4例(13%), B群経産婦3例(10%)であり, 両群間には有意差なく, また, 大多数は次回も母児同室を希望していた。

### III. 考 察

その長所は以前から数多く述べられているにもかかわらず, 何故多くの産科施設が24時間母児同室制・母乳哺育に移行できないか? を考え, その原因としてはじめにあげた3点につき検討した。その結果, 前記5項目の「糖液・ミルク追加基準」および「必要な場合には糖液・ミルクを足します」, 「疲労感が強ければ児を新生児室で預かります」, という支援の下では, 母児ともに特に問題なく経過することが確認できた。

また, 「母児同室用の個室がない」という点に関しては, 当科では個室あるいは2人部屋での母児同室であったが, 確かに今回のアンケート調査でも「赤ちゃんが泣くので同室者や他の患者への気兼ねがあった」という感想もみられた。しかし, 逆に他の赤ちゃんの泣き声が気になって眠れなかった, イライラした, という回答はほとんどなかった。長崎大学医学部附属病院における4人部屋での完全母児同室制<sup>2)</sup>等も特に問題なく行われており, 個室にこだわる必要はないと思われた。

「退院後いやでも大変な育児が待っているので, せめて入院中位はゆっくり休みたい」という考えもある。しかし, 今回の調査から, 医療スタッフの支援のある入院中に24時間育児・母乳哺育に慣れておかないと, 退院後直面する育児が大変になるということ, またA群母親の次の感想からも, 完全母児同室・自律授乳の長所が明らかである。「24時間母児同室・自律授乳でどんな1日を過ご

すかわかっていたので, 退院してからもあわてずに済んだ」。「母児同室のよかったこと: 自分子どもは人任せではなく, 自分で世話をしていかななくては, という責任をすぐに感じた。上の子の時は後からじわじわ感じてきた愛情が, 今回はすぐに強く感じ, 入院中を満ち足りた幸福な気持ちで過ごすことができた」。

もちろん, 母乳哺育が母親の心理的な負担になる場合もある。したがって, 母乳哺育成功のためには, 産後3日目までは母乳はあまり出ないのが普通(正常)であり, それでも頻回授乳を続けていけば4日目からはほとんどの母親で急激に分泌量が増加する, ということを理解した上での, 母親に対する心理的な配慮が重要である<sup>3)</sup>。

当科もまだ移行期にあり(現在, 糖液・ミルク追加基準①は見直し中), 母乳哺育に以前から取り組んでいる施設からみると, 当科の現体制はまだ不完全とうつつるかも知れない。しかし, 新生児専門医のいない産科施設においては, 24時間母児同室・母乳哺育への最初のステップとして今回の検討が参考になるのでは, と思われた。

稿を終えるに当たり, 御校閲いただいた高知医科大学相良祐輔教授に深謝いたします。

### 文 献

- 1) 第2回「母乳をすすめるための産科医と小児科医の会」記録集, 1994(〒161 東京都新宿区西落合2-20-1-501「日本母乳の会」TEL & FAX 03-3954-7686)
- 2) 仲川優子, 堀田初江, 小川由美子, 他: 大学病院での完全母子同室. 助産婦雑誌 47(12): 966-971, 1993
- 3) 小林登: 母乳哺育と人工栄養. 周産期医学 19(4): 439-442, 1989

\* \* \*